

書評

小野瞭
『文明 後 の世界』

(2013年、新泉社)

寺岡寛

はじめに

本書は著者自らの著作ではない。著者は本書の執筆を意図しながらも、自著の完成をみることなく鬼籍に入った。これを惜しんだ友人たちがくみ上げたものが本書である。このこと自体、著者の人柄と学識を物語っている。私事にふれる。評者自身は著者とは面識があり、筆まめな著者から論文の抜き刷りや近況を知らせる便りをいただいたものの、まとめて著者の研究上の歩みを本書によって改めて知ることになった。目次構成はつぎのようになっている。

- 序章 「文明」のビフォー／アフター
- 第1章 市場経済と資本主義経済
- 第2章 「近代」を超える 「自由・平等・友愛」の意味
- 第3章 社会主義経済と創業の自由
- 第4章 企業社会とは何か
- 第5章 「市場・組織・格差」 個人的自由の経済学
- 第6章 非資本主義的市場経済システムの可能性とネットワーク
- 第7章 「文明」を超える 「文明原理」と「反文明原理」
- 第8章 縄文時代の未来的可能性
- 第9章 「国家」を超えていく道
- 第10章 科学革命の展望 モノ・ココロ・カミー

第12章 複雑学とは何か 複雑系科学を超えて

第13章 複雑学と自然観の変革

終章 私の個人史

シンポジウム「小野瞭さんの知的挑戦」

編者あとがき (田端稔)

編者の田端氏におれば、著者本人の執筆プランでは「序章から第一章、第二章が公表された時点で、著者は帰らぬ人となったのである。……残念ながら第三章以降の原稿は残されていなかった。……(残された評者注) 覚書だけに依拠して第三章以降を編集することが不可能であることは、明らかであった」としつつも、著者の既発表論文を組み換えて刊行にこぎつけている。

参考までに小野自身による執筆プランを紹介しておく、つぎのようになっていたという。

- 序章 「文明」のビフォー／アフター
- 第1章 万人起業家社会論成立前史
- 第2章 資本主義経済と市場経済
- 第3章 「自由・平等・友愛」の意味論
- 第4章 所有構造とその変革 多重的所有の可能性
- 第5章 文明批判と組織批判 宗教批判
- 第6章 先史時代 「自由・平等・友愛」を実現していた社会
- 第7章 「多夫多婦制」下の家族と社会

第8章 「森林生活学」 地球環境問題をめぐって

第9章 世界の平和 国連憲章と日本国憲法第9条

第10章 科学と学問の新地平 内部観測の意味論

第11章 地球から宇宙へ

著者との私的交流史において、評者自身は著者からもっぱら「万人起業家社会論」などについて直接・間接に聞くことはあっても、その背景については忖度するしかなかったが、今回の著作によって知ることができた。以下、本書の概略を紹介するとともに、わたしたちが小野から受け継ぐべき未来への「遺産」についてふれてみたいとおもっている。

複雑系科学からの視点

終章「私の個人史」で、著者は従来の経済学の限界と制約についてふれ、「経済社会の複雑学」、大学に移るまで従事した地域調査機関での職業として地域調査、そして大学院に舞い戻ったの研究についてふれている。本来なら、この終章を序章にもってきたとすれば、小野の研究史が解き明かされ、彼の発想の原点がよりはっきりしたであろう。小野は「地域企業の調査・研究から得たもの」で「万人起業家社会論」へ至る途についてつぎのように述べている。

「私が学んだ、中小零細企業の没落の不可避性、彼らを襲うであろうミゼラブルな運命、遅かれ早かれプロレタリアートへの転化・合流は避け難い、というような教科書的な世界とはまるでそぐわない現実がそこにあった。」

小野は「親工場からのスピアウト」する気概をもった人たちの出会いを通じて「万人起業家社会論」構想をもつようになったことを率直に語っている。小野は「中小企業論・産業論」を専攻した大学院ではマルクス経済学に関心を寄せていた学部生からの「個人的

所有の再建」、「自由な諸個人（生産者）の連合」という視点からチェコスロバキアやハンガリーの経済学者の著作を通じて、「現実の社会主義諸国における私的小規模経営の実態研究」に取り組み、やがて京都精華大学を経て公立はこだて未来大学の複雑系科学科の創設にかかわる。

小野自身は「複雑学」について「近代西欧科学の世界では、……対象を数量化・数理化できない学問が存在することは許されても、『単なる思弁や観念の遊び』に過ぎないとみなされてきた文系諸学が『科学』の名を称することは許されなかった……経済学で一体何を明らかにし得るのかという根本的な疑念は少しも晴らされていない」ことを強調している。

そうした小野にとって、「複雑学とは何か」とはそれまでの「科学性」とされる「客観性」、「再現性」、「数理的記述可能性」の三原則でとらえきれない現象への接近方法をめぐるものであり、複雑学としての経済学など社会「科学」への人類史そのものへの探求を通じてのさらなる探求であったにちがいない。小野は従来の経済学についても「アダム・スミスが経済学を生み出したのではない。近代西欧科学の常識では、数学や物理学が先在して、その後に経済学・社会科学が生まれたとみなされている。だが、経済学を『生き抜く知恵』とするならば、それは人類の始原より存在した」と主張する。

この主張に沿えば、本書のタイトルにある「文明」後の学問世界である経済学・社会学に対して、「文明」前の世界をとらえる学の体系とする再度「文明」後の世界の再解釈が必要となる。小野がはるか縄文式時代に思いを寄せるのも理解できよう。小野にとって、文明とは組織化された都市や国家のあり方であって、それは本質的に暴力的なエネルギーをもつのであれば、組織化されていなかった文明の時代においてなぜ平和が保たれたのかを探ろうとする。小野は組織を「指導者や各

人の役割が固定化（あるいは世襲）され、不可侵の位階的権力機構が整備された『特殊集団』を意味し、そこでの文明は「何よりも権力的・位階的・差別的に『組織化・管理化された構造様式』そのものに他らない」としたうえで、中世の世界をつぎのように描きだす。

「中世の農民たちの多くは、『組織人』ではなかったがゆえに、自分自身の生活と労働作業の現場においては比較的自律的な自己決定を為し得ていたが、それと比べて現代の『組織人』たる大多数のサラリーマンたちは自分自身の生活を自己決定できていない。」

小野が展開した「万人起業家社会論」の着想の一端はここらあたりにあったのであろう。小野は「文明以前」の社会としての縄文時代の社会構成原理や自然観にも立ち入っているのもこのためといってよい。

万人起業家社会論

サブプライム・ローン、リーマン・ショックなどめまぐるしい出来事は、現在の「資本主義経済」の不安定性を市場原理主義に等値させて語られてきてもいる。小野はいう。「今、『市場原理主義』批判の大合唱に与する多くの論者たちは、ソ連・東欧の瞬時的大破綻というわずか二〇年前の歴史から一体何を教訓として学んだのであろうか」と問題を提起し、「いちば」の思想と「しじょう」の思想を区別する。

小野は「いちば」の思想において、「人類史のすべての段階において『交換』行為とその『場』が存在したのであって、『交換の場』のあり方の違いこそが、人類の歴史を区分する鍵概念となる。ならば、『いちば交換』を如何に上手く万人が参加でき納得し得る枠組みとして汲み上げていくべきか、その探求こそがヒトにとって望ましい未来の経済社会像を描いていくための基本的前提となるべきで

あろう」と指摘する。

小野の「いちば」論で、重要視されたのは「いちば交換」の成立の必要条件であり、具体的には「相求性」小野の造語、「相互信頼」、「所有の相互承認」、「対等性」という条件が「自由・平等・友愛」と「不等原理」という二つの原理を成立させていたと説くのである。他方、こうした全人類史を貫く「いちば交換」経済とは異なり、資本主義経済とは「『いちば交換』経済の発展途上に現れた特殊歴史的概念である」ことを強調する。

小野はいちば交換経済においてこそ、「自由で平等な友愛社会」が成立する可能性を見ようとする。そこでは「『市民個人ひとりひとり』の生存の権利、生活の権利を保障し、自己の生活に関わる広範な自己決定権（生活の自立性）を擁護するため」のビジョンが必要であるものの、そのようなビジョンはいまにいたるまで確立されてきたとはまったくもって言い難い。小野はそのような社会を成立させるための担い手として企業家（起業家）に期待を寄せていたのではあるまいか。

小野自身は企業家を単なる人間＝経済人（homo-economics）としてとらえるのではなく、「人間とは経済人であるよりも先に人間そのものである。つまり、人間は金儲けを自己実現の唯一の目的としているのではない。人間の根源的欲求、それは金儲けではなくおのれの自己実現である。……企業家とは、今日では金儲けの達人のように思われているが、彼は自己実現の手段として企業の設立という道を選んだのであって、……おのれの自己実現の欲求に忠実な、自主独立の気概溢れる人間としてとらえておきたい」とみる。

そうした企業家像の先には、「労働者が社会的所有のもとで実は何ものをも持たない社会でもない。労働者が労働者の身分・立場を振り捨てて自由に企業家になれる社会の実現、それこそが真に労働者の解放なのではあるまいか」と主張するのも理解できよう。

小野は「組織」に対して懐疑的であるがゆえに、新たな経済組織として「個人起業家の連合体」、さらには「万人起業家社会」としての資本主義論を展開する。小野自身は、そのような資本主義社会論は「非現実的なユートピアに過ぎないのであろうか」と自問し、「大規模化を好まず、自分の専門的知識や生活哲学と仕事との合致や仕事とのけじめを重んじ、また株式会社であれ協同組合であれ自己の独立性を損なう恐れのある組織形態を嫌う人々である。

もちろん、従来型価値観に従う人々もなお多く、恐竜的巨大大企業も決して自ら滅び去ることはないであろうが、時代は明らかに変わり始めた。こうした個人レベルでの自立化傾向の延長上に、すべての人々の経済主体化とそのネットワーク、すなわち、『万人の経済的自由と平等』をその内容とすることは、それ程途方もない空想であろうか」と自問するが、こうした動きを促す社会の変化を重要視しようとする。小野はいう。

「わが国のいわゆる日本的経営の崩壊現象も・・・その変化はエリート企業戦士たちの転職・独立志向や企業リストラ等に見表れているわけではない。それは、中小零細企業従業員やパート層までを含めた企業忠誠心の総体的弱まり、生活クラブ生協やワーカーズ・コレクティブ等の自立的ネットワークの拡大、女性起業家や退職者起業家の増加等々まで含めた、より多く人々の労働価値観・労働スタイルの変化、あるいは新々人類と揶揄される若者たちの企業組織への忌避・自由人への憧憬の強まり等の形で、日本経済の深部における基層的変質をもたらしつつある。」

小野は「こうした動きのすべてが、『万人起業家社会』の登場を促す巨大な潮流を形成している。彼らの多くは、大規模化を好まず、自分の専門的知識や生活哲学を仕事との合致や仕事と余暇生活とのけじめを重んじ、また株式会社であれ協同組合であれ自己の独立性

を損なう恐れのある組織形態を嫌う人々である」とも指摘する。この傾向の軽重については議論の分かれるところであろう。小野の思い描いた理想社会としての「万人の経済的自由と平等」=「非資本主義的市場経済システム」=「万人起業家社会」というある種の三面等価性についてはさらに議論が分かれるところであろう。

わたしたちの受け継ぐもの

わたしのように著者からもっぱら聞かされてきたのが「万人起業家社会論」であった者は、そうした持論の裾野には本書で指示されたように「組織化」された社会集団としての文明への彼自身の根本的な疑義があったことを改めて知らされたように思える。そして、小野がなぜ「複雑学」にこだわらざるを得なかったのも同時に理解できよう。そこには、「近代」経済学も含め、社会「科学」という計測性を前提とするようなものの方としての分析手法が多く計測困難な事象や現象をもっぱらその射程の外に打ち捨ててきたことへの憤りにも似たような彼の感性があったようにも、わたしには思える。

小野の没後に京都で知人や友人が集まって「小野瞭の知的挑戦」というシンポジウムが開かれ、二人の研究者が彼の研究を振り返りこの内容の概略は本書に収録されている、その後の懇親会で出席者それぞれが「小野論」を語った。郡司教授は「小野瞭先生の射程」で小野の言葉へのある種のこだわり、手あかのつきすぎた「神」ではなく「カミ」、「物」ではなく「モノ」、「市場」ではなく「いちば」、絶対主義と相対主義の見直しなど、小野の分析時間の長さや文化なるものの相対性への拘泥などが彼の「万人起業家社会論」の裾野にひるがっていることを出席者は確認していたのではなかったろうか。

塩沢教授は「小野さんは・・・組織・法人、あらゆるものを否定しました。そういう

ものじゃなくて、我々が生きていくような、生きていけるような、また自由闊達に交流できるような社会をつくりたい」と指摘したうえで、多くの人たちが疑問をいただく「万人起業家社会論」について「起業家に向かない人はどうしたらいいのかということです。……個人起業家の連合体というものですべてやっていけることができるのか」と問うた。また、上記では紹介しなかった「内部観察」という方法論についても、小野が十分な時間が与えられていれば、どのような展開をしていたのかなど問題を提起している。いずれもまっとうで自然な疑問である。

本書は編集代表の田端教授もふれているが、小野自身が先に紹介したプラン通りに完成したものでない以上、小野の問題提起と諸論が必ずしも整合的に展開していないのかもしれない。とはいえ、「万人起業家社会論」を展開してきた小野の率直な批判の背景への理解が深まったという点において、編集の苦勞が報いられているのではあるまいか。

ところで、本書には収録されなかった柄谷行人『原理 NUM』（正しくは『NAM 原理』）についての小野の書評「資本主義は『無窮』か」（下）で、小野は「私は十数年前から同じことを主張し続けてきた。資本主義（＝特殊歴史的概念）と市場（＝歴史貫通的概念）とを混同してはならず、……『市場』とは、元来、個人の自由な取引が禁止されていた時代に、権力によって例外的に承認された特別の日であって、誰でも参加できる交換の場、また同時に「ハレ」なる祝祭と交歓の場でもあった。『しじょう』とは、そうした属性を失い、近代経済学的に狭く規定された価格成立の数学的メカニズムの世界である。それは生身の人間の生活とは縁もゆかりもない」と指摘しつつ、NAM New Association Movement 「協同組合」という組織原理にもきわめて懐疑的である。

小野の組織への懐疑観がここにも強く表れている。ゆえに、「企業の中で組織社会の醜

い現実を知り、自律的起業や企業内部からの組織変革の必要性を体得し得るでもある。従って、『身を売るな』との宣託は、自身が主人公＝起業家になれと鼓舞し、勇気付けること以外としては理解できないのだが、その限りにおいてその宣託は理解し得る」とも主張される。

それでは、「いちば」という人びとの顔が実際にみえる交換の場において成立しうるビジネスとだれでも（＝万人）がその担い手たる起業家社会を成立させるには、どのような社会原理が必要なのだろうか。この手がかりは小野の「文明観」、「組織観」、「自然観」や「内部観察論」などにあるのかもしれないが、わたしにはそこまで踏む込める素養などはあるはずもない。

いずれにせよ、小野の「万人起業家社会論」とは米国のレーガン政権以降に頻りに浮上した「起業家経済論」とは大きく異なることを確認しつつ、この隔たりの元と先にあるわたしたちの社会のあるべき姿を探っていくことができるささやかであり、かつ大きな課題である。